W. B. イェイツの影

増谷外世嗣

この小論の運び方，解釈，説明，描写，暗示の仕方の中に，論理的に圧縮すれば簡潔に表明できそうなところを，稚拙な表現による具体をめぐって，展開のもどかしさを感じる読者もあることだろう。しかし，この小論の素材，およびその素材が自ずと投げかけてきたテーマが，それを批評的に取り扱う方法の中にさえも，追求するにつれ益々，抽象的概念による論理的結合を拒んできた。具体の中にある文学作品の生命を批評する立場と方法として，抽象概念で捕えることがあながち誤りであるとは言えないし，また一般化をさけて叙述などはありえないことはもはや当然の前提であることもわきまえつつ，それでも極力それを避けることを，原作への自己投入と密着が要請してくる場合がある。それがこの小論の展開のもどかしさとなったのである。「イェイツの影」というテーマを始めから頭の中に予定して，執筆し始めたわけではなく，イェイツの中にあってもっとも本質的な重要なものでありながら，どうしても捕えがたいものを追っているうちに，このテーマは生まれたのである。

*

この小論を終えてからの私の極論的暗示であるが，I. A. リチャーヅや T. S. エリオット，J. M. マリーでさえ，1920 年代半ばまでのイェイツは読みとれなかった。いや，読みとろうとはしなかったのかもしれない。その原因となったものは，イェイツの側にもあったであろう。その初期の作品の上に現われた常套，そしてそこからの展開があまりに遅々としていたこともあずかっていただろう。しかし，少なくとも 1910 年代以後の詩作品以外の作品をも充分に読みとれば，あのような見当はずれの酷評はなされなかったであろう。その読みとりにくさの原因を自らに問いつめたかどうかである。彼らの中に，イェイツを読みとるには最大の障碍となる論理的，宗教的，

批評的先行の観念はなかったであろうかと。が，その原因の追求はともかく，それほど，イェイツの歌わんとするもの，いや，生き方が捕えがたい影のようなものに蔽われていたと前提しても，この影のように淡いものが，イェイツにとっては反現代的 project としての工夫か宿命であっても，多様性を含むことは当然としてイギリス的文化的コンテキストを背負うエリオットや I. A. リチャーズにとっては，イェイツの存在の薄さに通じて解釈されるものであったようにも思われるのである。私がアイルランド人イェイツに肩寄せすぎるためであろうか。

*

1914 年，W. B. イェイツ 48 歳の時，出版された *Reveries over Childhood and Youth*, 50 歳を過ぎて結婚し，その後数年，1922 年に出版された *The Trembling of the Veil* に含まれるいくつかの自叙伝を読もうとする読者は，たとえ，それらが優れたユニークな自叙伝であると評価されても，その半ばに至らずして退屈し，とまどわされることがあるだろう。

たいていの読者にとっては詳しい説明のないかぎり不明な地名，人名，ダブリンやスライゴーの街角，岩角の名前が出てくるかと思えば，一方，或る友，或る老人，或る政治家の言ったこと，したことなどが，それらと同じ比重において重なり合ってくる。特定の日時と場所におきた特定の事件が，或る時，或る場所におきた或る事件というイメジと交錯して，そのクロノロジカルな整理がなされなければ，読者はこれらの伝記からはじかれてしまうような気がするだろう。それらが不統一に雑然と書かれているという意味ではなく，なんら奇をてらったところもないにもかかわらず，言葉の順序が普通ではなく，そして，それらがすべて一枚の窓ガラスかヴェールを通して映るイメジのようなもどかしさにかられて行く。その独特な影のようなものを追う興味にかられないと，この自叙伝は閉じられねばならなくなってくる。

また，さらにはイェイツの詩作品の秘密をとく鍵か支柱となるべき伝記的事実，あるいはクロノロジーを読みとろうとする態度にも，これらの書物は明確な答えは与えてくれないだろう。これらの自叙伝，あるいはそれらと前後するエッセイ・ノート風のものに蔽いかかっている影はいったいなにか。この影とは，彼の物語，神話，詩作品に登場してその一役を果たす shadows, images, dreams, などの訳語としてのそれらよりは，これらの自伝的作品を支えている基底というか舞台というか，全面にかかっている影か，わいてくる雲か，という意味においてである。

この捕えがたい影を追求して行くことが小論の目的であるが，その前にイェイツ以

外の普通の自叙伝と思われるものと対照して，その相違から暗示されそうに思われるものがある。

J. S. ミルの自叙伝と W. B. イェイツの自叙伝，そして S. スペンダーのそれと並べると，自ずとそれらの自伝の本質的相違がうかび上ってくるが，ここでそれらの相違のいくつかを分析してみようというのではなく，これらの自伝を書いた時の作者の（現在）と（回想されている過去）との間に介在する時間的距離についての作者の意識の相違を焦点とすれば，のことである。

青年時代から 2, 30 年の歳月をへて始めて回想記なり自伝が書かれることは，その程度の時間的へだたりがあってはじめて，己が過去を現在へと秩序づける経験解釈の構造がなり立ってくる，ともいえようが，回想すべき過去がなりたってくるということはいかにもそれが現在の形成に因果関係があるように回想され，秩序づけられていようとも，（過去の成立）は一面，（現在からの切断）なのである。ミルの自伝はいかにも淡々と気取らずに，その現在形成に役立った過去が特殊な立場に囚われずに，普通のロジックで書かれているようである。淡々として，ワーヅワスは彼の心を慰めるのに役立ったのである。その現在との関係は，役立ったか否かの経済的観念に結びついているのであって，己が現在と過去との時間的へだたりが，（回想される過去）と（現在）との関係の間に介在する重要な要素，むしろ立ちはだかる障碍としての意識は皆無といってもよいだろう。

これに対して S. スペンダーの自伝，とはいえおよそ歳月の回想ではなくて *World within World* という表題にも暗示されているほど，渦中の 30 年間である。そこに過去の成立は許されないほど，時間に追われつつ，しかもいわば（時間がない）現代が渦まいている。同時代の作家と読者という近親性や，現代における時間の短縮から生じてきた必然的な結果として捕えられる一般的特徴でもあろうし，なおまた，あらゆるものが同時的にその人間の現在をとりまいてくる世界に身を投じて行かねばならなかった生き方がその自伝の態度の底にはある。その 30 年間はスペンダーにとってはすべて（現在）であろう。だが，イェイツにとっては，すでに初期の詩を作り始めた頃に，時間が事件やものとの間に介在してそれらとの直接の対話の大きな障碍，胃袋の中にたまるような障碍となって，時間を払いおとさねばならない問題となっている。W. B. イェイツには，この事件やものから遊離した抽象された時間意識と空間意識がなにものかへの障碍としてかぶさってくると同時に，逆にそれを払いのけるための生活としての幻想と夢と，冥想が湧いてきたのである。

時計とカレンダーによってはかられる時間，メジャーによって計られる空間が，物

や変化現象から離れて存在するものと思っている者はいないだろうが，しかしこの抽象されたとはいえ，確立された時間と空間意識の故に捨象されてしまった世界を積極的に追求して，その世界を実感し，そこに描き出してみることは容易なことではないだろう。

*

Reveries over Childhood and Youth の *Preface* と本文の始まりは，軽い調子でなにげなく，そして少し奇妙な書き出しであるので，その充分な含意を見落しやすい。自叙伝の最後の Stirring of the Bones，その他の日記，エッセイなどを読んで改めてその重要さに気づかされる。

Sometimes when I remember a relative that I have been fond of, or a strange incident of the past, I wander here and there till I have somebody to talk to. Presently I notice that my listener is bored; but now that I have written it out, I may even begin to forget it all. In any case, because one can always close a book, my friend need not be bored.

I have changed nothing to my knowledge; and yet it must be that I have changed many things without my knowledge; ……(1)

（或る人，或る事を思い出す，それを書きつけたが，もう忘れ始めるかもしれない。私の知っているかぎりでは，なにも変えなかった，がしかし，それは私が知らずに多くのことを変えたということに違いない。）

My first memories are fragmentary and isolated and contemporaneous, as though one remembered some dirst moments of the Seven Days. It seems as if time had not yet been created, for all thoughts connected with emotion and place are without sequence.(2)

なにげなく書き出されているこれらの文中の remember, forget, change から memories fragmentary, contemporaneous, without sequence というような言葉に醸成されてくる或る mood を，1909 年に残された日記の中の次の一文と比較してみよう。

To keep these notes natural and useful to me I must keep one note from leading on to another, that I may not surrender myself to literature. Every

note must come as a casual thought, then it will be my life. Neither Christ nor Budda nor Socrates wrote a book, for to do that is to exchange life for a logical process.(3)

(一つの note あるいは帰結から次の note あるいは帰結へと辿る過程, logical process をさけて, わが身を literature に委ねてはならない。としている場合の literature はおそらく poetry と区別されている。ノートはすべて casual thought であってはじめてそれが自分の生活となる。本を書くということは生活を logical process にとりかえることである。) 始めに引用した二文について, あえて (なにげなく) と促がした態度の基底には, おそらくこの note についての戒めが働いている。

そしてさらに先の第二の引用中大切な点は contemporaneous, as though one remembered some first moments of the Seven Days と as if time had not yet been created であろう。この天地創造の頃の時間の未創造——神の一日は人間の千年であったかも知れない時間はあったであろうが——がなにげない書き出しの中に, my first memories に結びつけられ, casual thought の中に Christ や Buddha が本を書かなかったというようなことがきわめて自然に出ているのは, ヨーロッパ的文化的コンテキストの中にある者なら誰しもが象徴的文飾として自然に思いつくもののようでもあるが, このイェイツにとっては, このイメジは 1902 年の次の文章を思い出させる。

As soon as Christianity made their hearers desire a chronology that would run side by side with that of the Bible, they delighted in arranging their Kings and Queens, the shadows of forgotten mythologies, in long lines that ascended to Adam and his Garden.(4)

これはアイルランド文芸復興運動の中で, Lady Gregory が古代ゲーリックの物語を英語に整理し飜訳した物語 Cuchulain of Muirthemne についての感銘と激讃の中からの一文である。(アイルランドのみならずどこの primitive country にも, 人びとを結びつけ, 語りつたえられた aesthetic realities としての物語や歌や mythologies はあったであろう,) とイェイツは説く。(だがキリストの image-maker がキリストを十字架にはりつけた the wildest imaginations を historical reality と信じたか, 信じようとした。やがて Christianity が, その hearers にバイブルにそったような chronology を作らせたのである。)(4) そしてイェイツにとって logic は machine である。かくてアダムの園に向かって整理された forgotten mythologies

を，その作られた chronology から解放させることは，そのクロノロジーの確立のゆえに捨象され，閉じられた闇の世界，イェイツ自らの imaginations の世界への自己投入，image-maker としての激情を，うながすことになって行ったのである。

しかし，ここにキリスト教にまつわる chronology としての限定において捕えられた時間の世界は，イェイツのより心底においては，彼の「月の諸相」をとりまく永劫回帰のヴィジョンが生まれる前からあった永劫の相と対峙して，すでに 1890 年代にもっと漠然たる状態，moods として，なるが故に，おそらくはより直接的な実感として捕えられている。2 千年前かあるいは幾年か後に作られ，次第に大きく成長し，灰色に栄えてきた Chronos が現代のどこかで突然凋落する。

Time drops in decay,
Like a candle burnt out,
And the mountains and woods
Have their way, have their way. (The Moods)

山々と森は栄える——キリスト教以前の古代アイルランドの物語を復活させた先述の Lady Gregory の物語の中にある Tir nà nog (the Land of Promise), 英雄，武将の Cuchulain, Fergus などの戦い，野山をかける馬，美しき妻や女たち Emer や Deirdre などの恋と愛，——そこに伝えられる the great emotions of love, terror, and friendship は，すでに *Wandering of Oisin* 以来イェイツ自ら先駆してきた世界であるが，この Great Lady の同志をえたことによって，彼の勇気と自信は鼓吹されたのである。

「それらは今なおけがされないアイルランド人の世界であり，」「アイルランドの物語はギリシャ人がなぜその神話を daemons の活躍だと呼んだかを分からせてくれる。great virtues, great joys, great privations は神話の中に出てきて，いわば人類をその裸の腕の間に捕え，しかもその神性をはく奪していない。詩人たちはそのテーマを，歴史的感覚を与える歴史か物語よりは，すべてか半ば mythological な物語からとりあげてきた。だが一方には，生命の均衡 (proportions of life) を記憶している imagination は長い間の wooing にすぎず，しかもそれは，それが愛の炎となり marriage-bed となる前にその記憶している proportions of life を忘れねばならない，ということも分かっていながら[5]。」

このようにして彼の imagination の作用と mythology の世界を結びつけようと

する一種の苦悶的情熱は次のような実感で結ばれている。

「われわれアイルランド人はこれらの登場人物を心の中に抱きつづけるべきである。われわれが登ったり買いものに行ったりする岡や街に彼らは住んできたからである。時に彼らは夕暮ドアに影をなげかける岡の上でお互いに出会ってきた。もしわれわれがこれらの物語を子供たちに語り伝えたならば，この国土は，人びとがその心をギリシャやローマやユダヤに売り渡す前のような Holy Land になり始めるだろう。私が子供の頃，私は裏山へ登って行ったのは，南の地平線に流れる青い凹凸の山々を眺めに行っただけである。どんな美しさが私に失われていたことか，どんな感情の深さが今なお私の中にかけていることか。なぜなら誰もあの山々の背後にある魅力を私に告げてくれなかったからである。なんでも知っているはずの merchant captains でさえ教えてくれなかったからである！」(6)

こう結ばれたのは 1902 年 3 月である。

すでにロンドンに住んだ小学校時代から，対英土地抗争の波におそわれ，Maud Gonne にも出合い，その失恋の傷心のうちにもしばしば彼女とは出合い，アイルランド独立運動の志士 Parnell その他にも出合って，その烈しい独立運動の波がおしよせる中に，一方でイェイツや Gregory, Synge にとってはそれ以上に重要なアイルランド文芸復興の運動とは荒廃した祖国にこの imagination と mythology の世界を現実に定着させることであったのである。ちょうどエドワード朝 10 年間には，George Moore からでさえ，「やがて花瓶にさされた生花のように凋落する」であろうと目されていた夢想家イェイツはこの烈しい精神の高貴性を，彼の精神の現実性とも民族の現実性ともしようと苦闘していたときである。おそらく先述の，「なんでも知っている merchant captains」は貧しいアイルランドでは少ないだろうが，「他の国（おそらくはイギリス）では普通の階級の典型——行儀の育ちは悪くないが，精神の育ちが悪い人間，そのあらゆる考えが工場や学校や新聞で仕入れられ，大安売りのマークをつけていて，自分自身の頭ではなにも考えないで，impersonal mechanism に落ち込んでいる人間」(7)は 1909 年の Note にも押しよせている。こういう「繰り返しと多数の口の呼吸から作られる自信」は，「古きものと自分自身のもの」以外には確信の抱けない great lady と good poet をとりまいていたのである。彼の dreams, shadows, imaginations, あるいは logical な表現にすれば aestheticism は，E. Wilson のいう「やがて現実に裁かれるであろう」ではなくて現実に裁かれていた上でのことなのである。つまり *Reveries* や *Trembling of the Veil* はそれぞれ 1914 年，1922 年

より少し先に書き始められていようとも，またそれらの内容が青少年期の 1880 年代から 1900 年代のものであっても，これを書いている当時のイェイツには，小論の始めに投げかけた影か image かヴェールは，身を挽き臼の中に投じたものの現実の基盤か，his own self 自体か，その重要な部分にさえなっていたのである。ロンドンにあってイニスフリーを思い浮べるあの詩を，後年，イェイツ自らが読みあげる声は his own heart's core から震え出る呪詛か祈りのような御詠歌に似て，その内容よりは，歌いあげるその声の中に自らの ghost を浮かびあがらせようとしているかのようである。断片的な暗示のようであるが，あえて，連続的な logical process をさけて，これだけのことを前提として私はその自伝的書物をたどろうとしている。イェイツ自らの first memories からたどる以外に，この影を追う道がないからである。だが，もちろんこの自伝的作品以前のものもふまえ，併合して，この *Reveries* と *Veil* の世界へ入って行かねばならない。

*

Reveries は「ロンドンの或る窓から眺められる或る少年たち」の幻想から始まり，すぐにスライゴーの memories に移り，間もなくロンドンの小学校時代からダブリンの高等学校時代へと移って行くが，この三つの場所の交錯，往復は *The Trembling of the Veil* でも繰り返され，おそらくロンドンの姿や追憶が，イェイツ自らの中にあるスライゴーやダブリンの姿をより強く対比的に浮かびあがらせたであろうと想像される。この書物が，さらにこれらの書物を書き続けたイェイツが Irish としての自覚をはっきり打ち出していることは，彼が English でないことの自覚として再確認されねばならない。アイルランド独立運動は陰陽に進められ，自らもその周辺につながり，アイルランド文芸復興運動はおこされていようとも，長いイギリス圧制下にあったアイルランドである。アイルランド人たちのイギリスへの敵意は，イェイツをして人間の「敵意にこそ実体はあれ，愛になし」といわしめたほどの中で，その敵意の方向において Irish としての自覚をもつことには加担しえず，Irish であることの本質の実現に向かった自覚である。それは先述の Lady Gregory たちと共にアイルランド文芸復興に乗り出す頃に強い自覚となったのであろうが，*The Celtic Twilight* に浮かび出してくるアイルランドとイェイツが養われたのにはおそらく，ロンドンにおける小学校時代に知った（English でない Irish）意識があずかっているであろうと思われる。

English boys から吐かれる父や自分への侮蔑の言葉に，生まれて始めて，かっと

なって殴り合いをした。それからは names for being Irish で呼ばれ，今まで知らなかった友情と敵意なる二つのことを知った。当時，すでにアイルランドの The Land League は作られ，イギリスの地主たち（アイルランドにとっては不在地主でおそらくイギリスに居住していた）が暗殺されて，Anti-Irish の感情は高まり，到る処で人種嫌悪感は，相互に露骨となって，体格的にもけっして強くないイェイツが，眼をはらし，殴り合いをし，怒り，悲しむ生活が続いた。苦痛と暗影にとざされているような少年時代ではあったが，それでも，そういう危険な国に生活していることが，少年イェイツには誇り高く romantic であった。English boy の本にでてくるユニオン・ジャックや English Victory を読んでも，自分の国の人びとのことではないと思って，彼はスライゴーの山や湖，祖父や船のことを思い浮かべていた。悲劇的暗影の中にも gay でなければならない後年の，'LAPIS LAZULI' の素地はすでにこの頃に芽生えていたのである。「高まり行く土地戦争は青年時代のダブリンをとりまき，アメリカからフランスにわたる Fenian 運動にひろがり，貧しい小国アイルランド内自体にも Unionist と Nationalist, Catholics と Protestants, peasants と land owners, 独立運動自体の中にも，Parnell 派と Anti-Parnell 派との対立抗争は続き，イェイツ生涯の恋人であったモード・ゴーンを捕え，1917 年の Easter 反乱から独立運動の志士たちは銃殺されて行った。めくら男がめった打ちしあい血を血で洗う Tragic Generation は 1922 年の The Stirring of the Bones を書き終える頃まで続いた。

イェイツ自らの中にもこの憎悪と敵意に育てられて行った fanatic heart はあったのである。

Out of Ireland have we come.
Great hatred, little room,
Maimed us at the start.
I carry from my mother's womb
A fanatic heart.

しかしこの中にあって，なおもイェイツには，「いかなる敵意ある心の前にも，ハムレットが演じたように，ライオンの前にあっても目ばたき一つしないでその顔をみつめようとする(8)」secret ambition があり，さらには 16 人の志士が流した血が涸れきったアイルランドの井戸の泉となり，薔薇の花を育てる our own red blood にもなって行くつながりがあった。少年時代からのスライゴーとダブリンとロンドンを結ぶ影か声か，celtic twilight に蔽われるか呼びかけられて生れてきた *The Celtic*

Twilight (1893) と，もっとも初期 1885 年頃の詩作品 'The Island of Statues' の世界をのぞいてみよう。そこにはロンドンはまったく出てこない。

ヨーロッパの物質文明の恩恵や被害からはほど遠い小さな町か村か，寂寥たる Sligo の彼方には大西洋がひろがり，夏の夕べ長く，澄明なまでの薄暮，Celtic Twilight が土地のすべてを包み，色彩をぼかしてくる。その森や湖や山の穴に faeries や ghosts は住んでいた。

'I have seen it (faery), down there by the water, batting the river with its hands'. (10)

The Celtic Twilight の中に伝えられる物語は，イェイツの幼年時代，Sligo できかされた農夫や漁夫の談話である。水の faeries や風の精 Sidhe (Gaelic for wind)，入口に訪れて花嫁をさらって夢の国にいざなう ghosts らの談話の数々はいわば彼らの風土，生活そのものであった。中にはユーモラスな部分もあるが，全体としては薄い暗影にとざされている。

'A melancholy which was wellnigh a portion of their joy; the visionary melancholy of purely instinctine natures and of all animals'.(11)

この mood が人間イェイツ自体の要素の培われてきた基盤であり，土地自体でもある。

「私が少年の頃読んだ或るフランスの作家が，砂漠を漂浪するユダヤ人の心情の中には砂漠がしみこみ，彼らを砂漠の姿のままに作って行く，ということを書いていた。その作家がいかなる論証によって，砂漠の人間たちが破壊しえない children of earth であるかを証明したかは思い出せないが，それはその土地の elements (earth, fire, wind and water) がその子供を作るのだということかもしれない。……私は水が，海と湖と雨の水がアイルランド人をそのイメジになぞらえて作ってきたと思っている。私たちは Mythology に身を委ね，神々と顔つき合せて語り合い，その communion の物語はひじょうに多い。」(12)

その神話や伝説を語る老農夫や漁夫はしばしば，「なんの功績も希望も残されずにその生命が消えて行くため，長い悲しみを心に秘めてさまよい，自らの heart 自身に語る」かのようにイェイツには見え，聞こえ，彼の詩はそこから出発した。あらゆるものがそのものの主体性において捕えられるとき——dewdrops の音を the sound

of their own dropping として聞いたとき——悲しみに満ちているように見えた一種の宿命観はイェイツ初期の詩の mood であった。'The Islands of Statues' は，今からみれば不出来なぎこちなさが目立つが，全体を貫く基調は 'mournfulness of beauty' であるといえる(13)。

……sad's the murmur of the bees,
Yon wind goes sadly, and the grass and trees
Reply like moaning of imprisoned elf:
The whole world's sadly talking to itself.

(The Islands of Statues)(14)

注意深くあらねばならないのは，幾度となく繰り返される sad, moaning はそれぞれ bees の murmur の中にあり，草木自体の中に秘められてあり，世界がそれ自らに呼びかける声であり，波がその生命を嘆く音であることである。さらにそれらはイェイツ自らの heart か mind と交流して，その itself や themselves が shadows か images か voices として表われていることである。

そして今一つ *The Celtic Twilight* に見られる別な態度，神秘な経験に対する或る解釈——少年時代の一夜，一つの torch が湖を越え山の頂きに向かって不思議な速さで登って行くのを見たが，後でその速さを考えてみると，それは人力の限りをはるかに越えていた。その後，*The Celtic Twilight* の中で，それはひじょうに unreal に見えたためこの思い出は信じられないものと思っていたが，後になって友人の語る卑俗な思い出に較べて，次のように感じたと言っている。

That sense of unreality was all the more wonderful because the next day I heard sounds as unaccountable as were those lights, and without any emotion of unreality, and remember them with perfect distinctness and confidence.(15)

非現実的感覚なるが故に卑近なものより明確に自信をもってその非現実の世界を，なんらの emotion of unreality なく記憶している，というこのイェイツの態度は詩は触知しえない高い mood を捕えることにあると考えさせ，またそれは今一つ次のような確信に支えられていたといえる。

No matter what one doubts, one never doubts the faeries, for as the man with the Mohawk Indian on his arm said, 'they stand to reason'.(16)

ここにおいて *The Celtic Twilight* の世界が明らかに reason と reality に対峙している姿勢はかなり強く，内に懐疑を抱きながらも信徒である偽似信仰や科学に対する反逆として，彼の 20 歳前後，Charles Johnston や Madam Blavatsky との出合いによる Esoteric Buddhism や The Occult World への関心によって明確な態度をとって行くが，'Island of Statues' から 'The Wanderings of Oisin' の頃には，彼自身の中には混迷状態のまま続いていた。

「'Island of Statues' はそれなりにかなりの出来栄えであったと思う。……が，今 'Island of Statues' を終えて，私は岸なき海へ出かけ始めた。どこにも明確な輪郭をもったものはない。あらゆるものが雲と泡だ。この雲は 4 年前から現われ始めた。'Oisin' の第二部については，私のみが解く鍵をもっているものがいくつかある。The romance は読者のためのものである。読者はどこかに象徴があることを知りさえしないに違いない。もし気づいたら，かえって詩の芸術性はスポイルされるだろうが，全詩は象徴でいっぱいなのだ——だが，よし象徴はあれ，雲にとざされている。」(17)

「私はこの本 ('Oisin') にあまり希望はもっていない。むしろいくらか意味がはっきりしなかった (inarticulate) のではないかという気がする。いっさいが confused, incoherent, inarticulate に思われる。だが私はこのことは承知の上である。私の生活は私の詩の中にこめられ，詩を作るために私は生活をいわば挽き臼の中に破壊し，青春も友情も平和も世間的な希望もすりつぶしてきた。他人が楽しんでいる間，I stood alone with myself——commenting——commenting,——A mere dead mirror on which things reflect themselves. I have buried my youth and raised over it a cairn——of clouds.」(18)

'Island of Statues' と 'Seeker' の Epilogue でもあり，それをわずかに訂正した作品，Crossways の巻頭を飾る 'The Song of The Happy Shepherd' は，よかれあしかれこのイェイツ初期の山場である混沌を物語っている。その原形は

The woods of Arcady are dead,
And over is their antique joy;
Of old the world on dreaming fed;
Grey truth is now her painted toy;
But O, sick children of the world,
Of all the many changing things.

In dreary dancing past us whirld,
To the old cracked tune that Chronos Sings.
Words alone are certain good.
.....
The very world itself may be
Only a sudden flaming world,
Mid clanging space a moment heard
In the universe's reverie.
.....
To hunger fiercely after truth,
Lest all thy toiling only breeds
New dreams, new dreams; there is no truth
Saving in thine own heart.

この詩の中には，注意深く読んだ場合，明らかに同じ言葉，あるいは類似した言葉が，反対の意味をふくんだまま不決断のままに迷いつつ使われていることに気づく。たとえば，R. Ellmann も指摘しているように，'grey truth' which comes from scientific or other worldly knowledge と the truth which is in 'thine own heart'。また，現代にはなくなったが古代にあった dream や，卑俗な苦労によって生まれてくる New dreams, new dreams, あるいは詩人が半ば暗示している Words と同等視されうる dreams, the universe's reverie。これらはこの詩の骨格をなしている言葉でありながら，或る意味で，きわめて conventional な発想と詩人自らの胸奥からの発想が混迷しかかっている。しかし，Words alone are certain good. と相呼応して，The very world itself may be / Only a sudden flaming world, / Mid clanging space a moment heard / In the universe's reverie. のイメジの中に浮かび出てくる world と words, universe's reverie によって，詩人は words が単に signs of things ではなくて，things themselves であり，宇宙がそれから作られているものであることを暗示しようとしている。この部分は突如としてイェイツ中期の詩 'The Second Coming' に直結して行く chaos とも思われる節もあるが，words と dreams と the world との関係についてのこの驚くべき暗示——より抽象的な言いかたをすれば——言語と想像力と現実の問題がイェイツの心象の中に大きな混迷と暗示をよびおこしつつあったといえる。この重い大きな a cairn of clouds, 混沌と潜在力を抱えて，イェイツは O'Leary を知り，Occult World を迎え，Maud Gonne

に失恋しつつも，生の存在様式を探究して行くのである。

'The Island Statues' を発表する少し前の頃から，イェイツの psychical reserch, mystical philosophy への関心は始まっている。*Revereies* においては，イェイツが J. S. Mill への傾倒者である父の影響からはなれ，popular science から離反して行ったのは，この時であった，と言っている。イェイツが始めに接したのは，当時すでにヨーロッパに拡がっていた Theosophical Society によって出版された Odic Force についての小冊子であるが，とくに影響を受けた A. P. Sinnet の *Esoteric Buddism* であった。すでにダブリンにも Hermetic Society は作られていて，イェイツとほとんど時を同じくしてこの世界に熱烈な関心を持ち始めた Charles Johnston と共に，この協会に入って行った。Theosophy の運動は 1875 年頃から全ヨーロッパにわたる scientific, materialism, rationalism に対する反動として，Madam Blavatsky の創始した 'Synthesis of science, religion and philosophy' の運動であった。イェイツにとっても明らかに，science あるいは功利主義，ordinary system of education との戦いであり，とくにそれらが実利的意志を強める一方，人間の impulse を弱めることに対する反逆でもあった。さらにイェイツがそれにとくにひきつけられて行ったのは，東洋的秘教の，書物による解明ではなくて実際のペルシャ人教授や，Brahmin philosopher との対談的会合であったり，a spiritualistic séance（降霊術の会）であったことである。実際彼は，M. Blavatsky の会にも入っているし，降霊術の会で彼自身が一種の霊媒的経験をした驚くべき思い出が，*Reveries* の中にも出ているが，彼はけっして Theosophy や M. Blavatsky を信じたりあがめたりはしていない。むしろ Blavatsky にとって都合のいいことだけを言っている弟子たちを批判して，その会からはやめさせられている。科学的実験でなく，logical process でなく，Christianity でなく，一種の Universal Oversoul に体験を通し，自己を通して接してみたい欲求は，彼の natural liking かあるいは宗教的信奉ないしは道徳的目的に支えられているものであったより，実際そこにあった陽気な玩具であったろう。しかし，その霊媒的経験から数年たって，時々，自問している。

> What was that violent impulse that had run through my nerves? Was it a part of myself——something always to be a danger perhaps; or had it come from without, as it seemed? (19)

何カ月か，かかって書かれた *Reveries* も終りに近づいて，最後に彼はこう結びつつなにかを暗示している。

「この何カ月か，私は私の青少年時代と生きてきた。かならずしも毎日書きはしないで，ほとんど毎日，思い出しながら。……私の読んだ本，聞いた wise words, 両親にかけた心配事，私の抱いた希望などのことを思うと，私自身の生活の秤にかけられたあらゆる生活は私にとっては，到底おこりえないような或ること（something that never happens）に対する準備のように思われてくる。」(20)

*

この something that never happens の暗示するものが，次の 'Four Years: 1887-1891' から次第に明らかな形をとってくるようである。しかしこの期間の最初におきている大きな事件はモード・ゴンとの出合いであるが，ここでは，その美しい均齊美，女神のような凄愴美と，彼女の戦争についての考え方——戦争が或る virtues を造り出すものとしてではなく，戦争そのもの，その excitement そのものの故に戦争をたたえる——に驚きながらも，彼女が classical impersonation of the Spring(21) として映り，それはイェイツのどこかで，彼女の凄愴美と，英雄的戦いの悲壮美が結びついてその後の作品の中に登場する Helen その他の女とも結びついてくることを暗示して，ここでは，以前の小論『W. B. イェイツの芸術形成とその背後』と次の機会にゆずることとして，別の重要な問題に移ることにしよう。

それは彼の「少年時代からつきまとってきた scientific generalizations」(22)との戦いである。すでにこれらの本の中でも，イェイツ自らが犯してきた多くの generalizations を恥じつつ，彼は，generalization へと駆りたてるような書物を読んだり人びとに会うことを拒絶してきたことを語り，それは「最初に海をとびだした魚が，最初に海からとびだしたのは，空気への適応性を求めたからではなくて，海の恐怖からとびたったのであると思われる」(23)ようなもので，「私の imagination がともかく abstraction から救われるように祈り始め，10 年以上も，このことで絶えず後悔し続けてきたが，今はただ，私の abstractions が絵と劇化に構成された時には満足するようになった」(23)と言っている，この科学との闘争は，一方，現実に眼前にひろがって行く「世界の fragments への分解」，violent free trader, propagandist of liberty, 職業や階級やファカルティの分類ではなくて孤立化，ぞっとするロンドン，増大する殺人状態，というような断片へと分解して行く諸相への闘いと基を一にしている。'Second Coming' の前半のシーンはすでにこの頃にできあがっている。だが，この断片へと分解して行く世界を片目に見ながら，彼は他の一方の片目で人間や民族の中にある Unity of Being といわれるような或るものを見ていた。（ホーマーが普通の

人びとに歌われ，ダンテの神曲の数節が普通の人びとに歌われていた時代から，シェクスピアの生まれる少し前頃までに，ヨーロッパは一つの mind and heart を断片へと分解し始めたのではなかったか？ チョーサーがすでに music と verse の分解を始めたのではないか？）(24)というようなことを考え続けつつ，「あらゆる民族はその最初の unity を，彼らを岩や岡に結びつけている mythology からもったのではなかったか？ われわれはアイルランドに多くの imaginative stories を持っているが，それはその昔，未教育な階級の人びとが知り歌いもしたものだが，それを今，教育ある人びとの中にはやらせることはできないだろうか？ ……それはいわば literature と music, speech, dance との結合であって，そうなれば，ついにはあらゆる芸術，詩人，職人，労働者，などが共通の意匠を受け入れるようになるように国家の政治的情熱も深いものにして行けるのではないだろうか？」(25)と，Unity of being への欲望は高く，深くイェイツの中に燃えつづけた。

この fragments と unity との相克は，イェイツの内にも外にもいよいよ，刻み深く，'The Stirring of the Bones' の最後まで続いて行った。その Unity of being は，個人，階級，国民の中に Unity of Culture がなくしては求められないものであり，そしておそらくそんなことは不可能なことであることもわきまえつつ，しかも，或る Unity of Culture は，Nations, races, and individual men are unified by an image, or bundle of related images, symbolical or evocative of the state of mind, which is of all states of mind not impossible.(26)という考えが漠然としかし間歇的にイェイツには訪れた。

The Irish Literary Society の創設やその他一連のアイルランド文芸復興の運動をおこして行ったイェイツの意図は，深くはこの欲望にかられてであったが，外には，Parnell の死後独立運動の Parnell 派と Anti-Parnell 派の分裂が深まり，Unionists と Nationalists との抗争がつのる中を，モード・ゴンを助け，自らも各地の会合や大会に参じて，その内部的分裂抗争をくいとめるべく働きかけているが，イェイツにとっては生涯最大の惨めな時代であった。反英デモの群衆と弾圧の警察との衝突，流血は幾度となく繰り返され 1898 年，Queen Victoria's Jubillee の頃にはなお激化の一途を辿った。この間の事状に詳しいアイルランドの歴史家たちは，おそらくヒットラーの歴史を除けば，今世紀ヨーロッパでは最大の悲劇であったろう，という。

ヴィクトリア女王のダブリン訪問に際して，Unionists はアイルランド中から二千余の子供たちを集めて歓迎し，一週間後には，モード・ゴンが四千余の子供を集めて反英デモ行進をする。イェイツにはこの対立を悲しみ恐れる一つの眼があった。——

「これらの子供たちが，30 前後の大人になったときは，どんなに多くの者たちが，銃丸を運ぶことだろう ?」[27]

当時，ロンドンにあってフェニアン策謀の指導にあたっていた，厳密な理論家であり，過激派の一人であった O'Leary に強く影響されたモード・ゴンは，「今こそ男たちは自分たちの国のために生命をなげだすべきときであるのに，彼らはその人間としての威厳の方を犠牲にしてしまっている。」[28]と呼びかけ，このアイルランド国民の独立という大義の前にはいかなる手段も正当化されるという考えに立っていた。しかしイェイツ自身も宣誓こそしてはいなかったが，自らはフェニアン運動と共に起こされた Irish Republican Brotherhood (I. R. B.) の一員であり，アイルランド国民主義者であることに変りはなかったが，彼にとっては手段が問題であった。過激な「暴動と憎悪がその実体である」ような運動の中から，彼は「手段こそ目的を正当化するものである」という穏健派の立場を学びとっており，政治は憎悪と見識に呪われた生活であると体験したイェイツはとくにゴンの美がこの憎悪と見識とによって破壊されてしまうことを恐れさえした。そこまでイェイツの中には，大義のためとはいえ，革命運動によって犠牲にされるよりは，まもられねばならない或る存在様式がイェイツの心情のどこかに根強くはっていたといえる。角度をかえて要約すれば，「ゴンの求めたものはその青春の決定的献身の刻印的行動であり，イェイツのそれはある一つの存在様式 (a state of being) を発見し，それを伝達しようとすることにあったのである。」[29]とも言えよう。しかしこれは彼が自らの現実の生活，行動と，この存在様式の追求を遊離させていたのではなく，あくまで Unity of Being へと志向させる身一つの中にかかえる二律背反の一つであり亀裂であったろう。

かつての独立運動の勇士 Wolf Tone (1763-98) の記念碑の開幕式が行なわれる折，行列をなして集まった民衆の前で，この Wolf Tone Memorial Association の会長になっていたイェイツは I. R. B. のために話しかけるように招かれた。

「イギリスから分離することによって不信をかったアイルランドは降服しようとしている――一握りの施しものを受けようとしている，とイギリスは偽瞞政策をとってきた。われわれは今日これに返答した。アイルランドはもはやだまされない。われわれ国民がこの運動をおこしているのだ……」[30]と。すると民衆の間からかけ声が呼びかけた。「そうじゃない，この運動をおこしたのはモード・ゴンだ」。民衆の激情は高まり，秘密結社は浸透して行ったが，しかしゴンの容姿はなおそこなわれず優雅で，その声は優しく，低く，親しみと畏敬の念で喝采された。

このモード・ゴンの姿を眺める二つの眼がイェイツにはあった。

When men and women did her bidding they did it not only because she was beautiful, but because that beauty suggested joy and freedom. Besides there was an element in her beauty that moved minds full of old Gaelic stories and poems, for she looked as though she lived in an ancient civilization where all superiorities, whether of the mind or the body, were a part of public ceremonial……Her beauty, backed by her great stature, could instantly affect an assembly……for it was incredibly distinguished, and if……her face, like the face of some Greek statue, showed little thought, her whole body seemed a masterwork of long labouring though, as though a Scopas had measured and calculated, consorted with Egyptian sages and mathematicians out of Babylon, that he might outface even Artemisia's sepulchral image with a living norm.(31)

（民衆の中にひときわ背高くそびえたつ彼女の美は均齊の計られたギリシャ彫刻に似た無思想の美をもっている。しかもその美の中にはゲール人の伝説，物語，詩に溢れた心を動かす或る要素がある。民衆の中に立つ彼女の姿は，古代民衆の祝祭が，精神的であれ，肉体的であれ，民衆の諸々の優越感がその祝祭を構成する部分であったような古代文明の中に生きているようでさえあった。）というのである。

この見方は，生々しい政治目的をもった憎悪の群衆，反英抗争という現実を眼の前にしながらも，彼は，祭祀と政治と民衆と芸術意識が個別化されていない，或るユニティ，インテグリティの失われていない古代的存在様式を想定している。想定しているとはいえ，しかし，その態度は，そこにひきずりおろし呼び出しているような姿である。ここに先程引用した，the state of mind を象徴する，an image or bundle of related images によって，個人や民族や国民が結びつけられてはじめて，Unity of Being は実現されるであろう，という漠然たる欲望は，苛烈な現実を前に，イェイツの中では想像力による回想的イメジとして生きていたのである。

分裂し，抗争する民衆の中に，ゴンの中に，失われて行くものの image が眼前をかすめて行く。数年後，3 歳のわが娘には女のインテグリティを失わないように育って行くことを祈ったイェイツの，現実とイメジ，fragments と unity，人間とマスクとのつながりなどを，作品の上に跡づけて行くことは，前述の小論，と今後に譲ることにして，この直接的な politics と戦いつつ，より深層において，science と戦わねばならない面があった。この不可避的な政治的世界を前にして，このイェイツ的世界はいかにも悲愴であるが，より広く，より当然のこととして日常の世界に確立され

ている科学の世界と，対峙しなければならないイェイツにとって，現代における science に対する literature の位置づけの中からも彼の gay の態度が生まれていることは見落されてはならないだろう。

「嘲笑と迫害を通して science は肉眼の前を通るものはなんでも探る権利を勝ちとってきた。単にそのものが肉眼の前を通るという理由だけから。いわば，かぶと虫とくじらを同等の立場におくことを勝ち得たのである。……文学は今，心の眼の前を通るものをすべて，それがただ心の眼の前を通るという理由だけから同じ権利を要求する。」(30) これは，「ただ物理的客観性に精神的客観性をおきかえただけで，完全な弁護ではないが，一時の答えとし，歴史的道程の中にわれわれの位置づけをしようとするのにはこれで充分であるかもしれない。」(33)

「批評家だったら，私の世代の或る者たちは，長い間禁断されてきたもののために非科学的な偏見で書くことを喜んでいる，と答えてもよかろうが，とくに長く禁断されていたものを探ることが重要なのではなくて，イブセンの追随者のように『最高の道徳的目的をもって』ばかりでもなく，そういう精神の遊戯の中に，陽気に，ただいたずらから，喜びからそうすることが大切なのではなかろうか？」(34)

悲劇的現実と日常の中に，文学を位置づけようとするこの軽い gaily の態度はおそらく幾重にもとりまかれた悲劇の中にあっても，非現実性と不可能性を仰ぐ悲愴を排除して，unity の様式を日常的現実の世界に結びつけようとする道化的マスクの悲願のように思われる。作品 'Easter 1916' や 'LAPIS LUZULI' が成立した基底はここにあるだろう。

*

時間の克服と影との結びつきの面が，イェイツ的世界の始めに登場してきたが，これと共に（ものを離れた空間）の克服の問題はじつはこの影の中に入ってきているのである，イメジの登場する空間は精神の中にある。が，この問題についての詳細は次の機会にゆずることにして，その一端を引用してこの稿を閉じることにしよう。

「空間は古代には，もの（objects）と結びついた mind's inseparable "other" であって，テーブルとそれがしめる場所とは不可分であった。17 世紀の間に，空間は mind からも objects からも離されて，a nothing yet a reality として考えられた。場所はテーブルではなくなったのである。material objects が味や臭や音から，数学者が計りきれない一切のものから離れたのと共に。そしてその空間は精

神に先行し，精神の死後にも存在し続けるであろう，と人は教えられたのである[35]。点と線が定規かコンパスかなにかで，どこかで出発し，透視画法が作られ，すでにルネッサンス半ばに，世界は wisdom に疲れ，科学が透視画法や重量感の中に現われ始め，人間はその頭を休める枕をさがし始めた。しかし，なおそれよりいいことには，その休む頭にヤコブの夢がきざして，人間を除去することができた。文明は masses の中に眠り，wisdom は科学の中に眠った。眠ることが罪か？ 私は知らないし，そうはいわない。」[36]

ヨーロッパ精神史を一握りにして眼前に浮かべているこの中にある wisdom がバイブルの中にある（神々と共にある wisdom）に言及しているか，どうか，イェイツの場合，その言及が暗示されているとかぎらない方がよい。イェイツの wisdom は科学の中に眠らずに，imagination の中に醒めていたのである。60 を越えてなお「霧か雪のように狂おしく」生誕以前の自由を記憶する揺らんから墓場へと，逆に墓場から揺らんへと，あがき，突っ走りながら。

注

1. 2. *Reveries over Childhood and Youth.* (1914); *The Autobiography of William Butler Yeats.* (1958) (以下 Reveries とする)
3. *Estrangement* (1909); *Auto.*
4. 5. 6. *Cuchulain of Miurthemme* (1902); *Explorations* (selected by MRS. W. B. Yeats, 1962)
7. *Estrangement.*
8. *Reveries.*
10. 11. 12. 13. *The Celtic Twilight* (1893); *Mythologies.* (1959)
14. *The Variorum Edition of the Poems of W. B. Yeats.*
15. 16. *The Celtic Twilight.*
17. 18. *The Letters of W. B. Yeats* (1954); Allan Wade
19. 20. *Reveries.*
21. 22. 23. 24. 25. 26. *Four Years*; *Auto.*
27. *The Stirring of the Bones*; *Auto.*
28. 29. 30. *W. B. Yeats*; J. Hone.
31. *The Stirring of the Bones.*
32. 33. 34. *Tragic Generation*; *Auto.*
35. 36. *On the Boiler.* (1938)